

## A-5

# ハイブリッド言語としての黒龍江省朝鮮語

高木 丈也(慶應義塾大学 総合政策学部)

**1. はじめに** 中国東北地方には、日常生活において朝鮮語を使用する人々が居住している。彼らは、朝鮮族と呼ばれる民族で、主に 19 世紀末から 1940 年代までに朝鮮半島から移住した人々の末裔である。『中国 2010 年人口普查資料』によると、朝鮮族は、中国全体で 183 万人ほどの人口を有しており、東北3省に多く居住している。彼らの話す朝鮮語は、移住世代の出身地、移住後の中国国内における移動経緯など様々な要因の影響を受けるが、一般に吉林省延辺、黒龍江省牡丹江には咸鏡道方言を、遼寧省東部には平安道方言を、黒龍江省西北、西南部には慶尚道方言を基層とする話者が多いとされている。こうした中国朝鮮語について、方言学の枠組みで扱った論考をみると、韓国や中国などの学界で少なからぬ蓄積があることがわかるが、その一方で、それらの多くは人口比率が相対的に高い吉林省 延辺朝鮮族自治州における話者(即ち咸鏡道方言話者)を扱ったもので、非集住地域である黒龍江省や遼寧省の話者を対象にしたものは極めて少ない状況にある。そこで、本発表では、既存の研究では十分に明らかにされてこなかった黒龍江省在住の朝鮮族の言語について、特に尚志市在住、移住第4世の談話に注目して分析してみようと思う。尚志市在住の朝鮮族は、その多くが慶尚道から移住した人々の末裔である。しかし、その一方で、尚志市における朝鮮族人口は市総人口の4%を切っており、優勢言語としての漢語の影響が極めて大きいであろうこと、177km 離れた牡丹江地区には咸鏡道方言話者が多く居住していること、さらには、近年は韓国との交流が活性化していることなど、彼らを取り巻く特殊な言語環境を考慮した時、その言語には一種のハイブリッド(hybrid)化した言語的特徴が現れる可能性が高い。初期の移住から1世紀余りの時を経て、彼らの言語はいかに変容しており、その使用はいかなる特徴をみせるのであろうか。本発表では、発表者が実際に現地にて採録した談話資料をもとに、共時態としての当地域の言語の諸相を分析することにした。

**2. 先行研究** 本章では、黒龍江省朝鮮語に関する先行研究を概観する: **【表1】先行研究における記述**

論考	分析、記述対象	主な分析、記述内容
He Tekhayng, Pak Thayswu (1990)	黒龍江省 朝鮮族の二重言語実態	①漢語の使用率は農村より都市で高い。②若年層ほど朝鮮語に対する愛着が弱い。③日常生活における漢語使用者の比率は、増加の一途を辿っている。
全学錫 (1996)	中国朝鮮語諸方言の記述(中国で刊行)	泰来県 四里五郷、五常市 長山郷、哈爾濱市 道里区の朝鮮語話者の音韻、文法、語彙の特徴を記述。分析地域では、[w] > [ɔ], [e] > [i], [jɔ] > [ɛ]のような母音交替や[j], [w]の脱落といった音韻現象がみられるほか、終結吐や接続吐の使用においても主に東南方言を基層にした言語的特徴がみられる。
I Cangsong (2004)	哈爾濱市 朝鮮族の言語使用様相	①調査地の話者は、自身の話す韓国語変種を慶尚道方言であると認識しており、それは抑揚に起因するところが大い。②その一方で中国朝鮮語の標準語や中国語の影響を受けた結果、必ずしも慶尚道方言の音韻体系を有した言語を使用しているわけではない。
Pak Lyenok (2013)	黒龍江省 東南部地域における朝鮮語の使用実態	①牡丹江市 東寧市、密山市などでは、都市への人口移動による農村の朝鮮族人口の減少が加速化しており、それに伴って朝鮮語の使用比率は都市で高くなっている。②都市における朝鮮語の使用は、漢語との接触がより頻繁であるため、言語変異が生じている。

上掲の表にみられるように、既存の研究においても黒龍江省朝鮮語を扱った論考は、いくつかが存在しているが、それらは調査時期が古いものや、言語選択や言語意識を扱ったものが多く、共時態としての黒龍江省朝鮮語話者が、実際の相互作用の場面においてどのような言語使用を行なっているのかを分析したものは、ほとんど存在していないといつてよい。また、言語接触や言語変化を扱った論考も散見されるが、いずれも漢語との接触や語彙借用を扱ったものが多く、やはり分析地域の言語状況を広く扱った研究は少ないことがわかる。本発表では、こうした既存の研究の問題点を補完すべく、最新の言語調査に基づいた記述的研究を行ないたいと思う。

**3. 調査の枠組み** 本発表では、2018 年 5 月に黒龍江省 尚志市 朝鮮族中学校で、発表者が独自に採録した談話の音声・文字化資料、および、すべてのコンサルタントに実施したフォローアップ調査の結果を分析対象とする。

談話採録の枠組みとコンサルタントの情報は【表2】のとおりで、いずれも親しい間柄の話者による2者間談話(計8談話)である。なお、本発表では談話開始から12分の範囲を分析対象とする: 【表2】談話採録の枠組み

談話名	話者名	年齢	性別	出身地 (本人)	出身地 (父親)	出身地 (母親)	談話名	話者名	年齢	性別	出身地 (本人)	出身地 (父親)	出身地 (母親)
H1	HN1	15	女性	哈爾濱市	木蘭市	木蘭市	H5	HN9	16	男性	尚志市	不明	不明
	HN2	15	女性	尚志市	哈爾濱市	哈爾濱市		HN10	16	男性	尚志市	不明	不明
H2	HN3	16	女性	尚志市	尚志市	北朝鮮 (不明)	H6	HN11	16	男性	尚志市	不明	不明
	HN4	16	女性	尚志市	不明	不明		HN12	16	男性	尚志市	不明	不明
H3	HN5	16	女性	尚志市	尚志市	尚志市	H7	HN13	16	男性	尚志市	尚志市	哈爾濱市
	HN6	16	女性	尚志市	惠林市	惠林市		HN14	15	男性	尚志市	尚志市	尚志市
H4	HN7	15	女性	尚志市	不明	不明	H8	HN15	16	女性	尚志市	尚志市	尚志市
	HN8	16	女性	尚志市	尚志市	尚志市		HN16	16	女性	山東省 青島市	不明	不明

**4. 分析** 本章では、分析する談話の特徴を(1)慶尚道方言、(2)中国朝鮮語、(3)韓国語、(4)朝鮮語の他方言、(5)漢語の5つに分けて考察し、最後に(6)誤用、(7)コードスイッチングの出現様相についてもみることにする。

**4.1. 慶尚道方言** 慶尚道方言を基層とする言語的特徴について音韻、語彙、文法という観点からみてみよう:

[例1] (1)HN11:Chaymphaiyn kyelsung **sengcanun** palo….(勝者は)

(2)HN3:Ni ilen mal hanun **ki** taykey taptaphay yakkan….(~ことが)

(3)HN3:Nay **haykkyo** wase celtay kongpwuanhay.(学校)

(4)HN3:**Meys** ssii~.(何時)

(5)HN3:Animu ne ipen **illoyoiley** me hanunka?.(日曜日に)

(6)HN16:Maumey com etinka com **taptapay**.(もどかしいよ)

単母音は、慶尚道方言と同じく6母音体系を保有する話者が存在した。すなわち、[ɔ]と[u]は[ɔ]に、[ɛ]と[e]は[ɛ]に合流した結果、[a, ɔ, o, u, i, ɛ]という6母音が弁別的な対立をみせている。(1)は、[u] > [ɔ]という合流現象を示した例で、**sungca**(勝者)が[sɔŋdʒa]で現れている(やや中舌化して[ɔ]というよりは、[ɔ]に近い音に聞こえる)。徐炳國(1983)によれば、このような合流は慶尚北道地域においても慶州や大邱など南部地域で見られる現象である。また、(2)は[e] > [i]というやはり慶尚道方言に特徴的な交替を示すもので、~ **kesi**(~ことが)の口語体である~ **ke**が[gi]として現れた例である。(3)、(4)は、ウムラウト(Umlaut)現象を伴ったもので、(3)は **hakkyo**(学校)において[a] > [e]という交替が、(4)は **Myech si**(何時)において[jɔ] > [e]という交替がそれぞれ起こっている。このような逆行同化(前舌化)は、例えばソウル方言などにおいても現れるものではあるが、そもそもウムラウト現象自体が南部方言でまず起こったものであること、共時的にも慶尚道方言においてより頻繁に起こるものであることを考慮すると、基層方言の影響を受けたものである可能性が高い。さらに(5)は、やはりソウル方言より慶尚道方言において起りやすいとされるn挿入の例で、**ilyoil**(日曜日)が[ilnjoil] (n挿入) > [illjoil] (流音化)という過程を経て、実現されたものである。最後に(6)では **taptaphay**(もどかしいよ)が[-bɛ]として現れているが、これは慶尚道方言に特徴的な激音化の回避現象が現れたものと思われる。ところで、このような特徴がみられる一方で、同一話者の発話における母音の出現を見てみると、常に特定の母音が非弁別的であるわけではないことも確認された。例えば、HN11の発話では、**kulentey**(ところが)という語の縮約形に対し、[kunde]、[kɔnde]という2つの形が確認された。このような母音の弁別現象のゆれが確認されるのは、学校における朝鮮語教育や、他方言話者との接触による影響が少なくないと思われる。

[例2] (1)HN8:**Nay** kyeysook wusko siphta.(私)

(2)HN3:**Ni** kuke ku nwukwu cohahanun tulama malhaypwapwa.(あなた)

- (3) HN4: **Susaym** nayssnunkeya. (先生)  
 (4) HN7: Na paiollin tasi haypollyeko hayssnuntey **halmayka**… (おばあさんが)  
 (5) HN3: Nelangun me nolayto **mai** thonghacito anhko… (たくさん)  
 (6) HN11: **Inca** sippwuni cinassupnita. (もう)  
 (7) HN7: Ya, **esswulo** aphutaya ! (とても)

(1)、(2)は人称代名詞の例で、(1)では1人称代名詞である na(私、僕)が nay で、(2)では2人称代名詞である ne(お前、あんた)の単独形が ni で現れている。また、(3)、(4)は名詞の例で、(3)では **sensayngnim**(先生)が **susaym** で、(4)では **halmeni**(おばあさん)が **halmay** で現れている。(5)～(7)は副詞の例である。(5)では **manhi**(たくさん)が **mai** で、(6)では **icey**(もう)が **inca** で、(7)では **maywu, emcheng**(とても)といった意味の副詞 **ekswulo** がそれぞれ現れている。これらは、いずれも慶尚道方言でよく使われる語彙である。

[例3] (1) HN6: **Pwulmanissna** ? . (不満あるの?)

- (2) HN3: **Ahopsika** ? . (9時なの?)  
 (3) HN12: Me ‘きらいです’ka tto **meko** ? . (何なの?)  
 (4) HN7: Nayka **ttaylicwukkey**. (殴ってやるよ)  
 (5) HN16: Kuntey **sallamyen** tto appaka mos ssaakey halkkapwa… (買おうとすると)  
 (6) HN12: A, **molumun** ka. (わからなければ)  
 (7) HN4: Susaym **nayssnunkeya**. (出したんだよ)  
 (8) HN3: Swuhak ipeney cal **chiya** tway. (受けなければ(ならない))

(1)は動詞、形容詞、存在詞の肯否疑問文に結合する-na?、(2)は指定詞の肯否疑問文に結合する-ka?、(3)は指定詞の疑問詞疑問文に結合する-ko? が現れた例である。また、(4)は意志、約束を表す-(u)lkey が- key<sup>[?ke]</sup> で、(5)は意図、目的を表す-(u)lyemyen が-(u)llamyen で、(6)は接続形語尾-(u)myen が-(u)mun で、(7)は現在連体形語尾が動詞の過去形語幹に結合し-assnun/essnun の形でそれぞれ現れた例、(8)は語幹末に-iを持つ用言の-a/e 形において ye>i いう交替をみせた活用形で、**chyeaya**(試験を受けてこそ～)が **chiya** として現れた例である。こうした語尾類は、いずれも慶尚道方言の影響を受けたものである。以上、慶尚道方言の影響を受けた発話をみたが、例えば、慶尚道方言に特徴的と言われる[k, k<sup>h</sup>, ?k] > [tʃ, tʃ<sup>h</sup>, ?tʃ] ([kimtʃ<sup>h</sup>i] > [tʃimtʃ<sup>h</sup>i])という口蓋音化や、[u, u] > [i] ([kasum] > [kaʃim], [karu] > [kari])という前舌高母音化、さらには **mwuwullay** (**mekullay**)や **iseyay** (**isseyo**)、**isela** (**iela**)のような用言の活用形は確認されなかった。さらには全学錫(1996)で報告がされている慶尚道方言に影響を受けたとされる-kwuma, numay, -la/ila, -lkkii/ilkkii, -kka, -lkang/ulkang のような終止形語尾も出現が確認されておらず、本節でみた慶尚道方言に特徴的な形もその出現数自体としては決して多いものではなかった。以上の結果から、黒龍江省 移住第4世の朝鮮語は、全体としては慶尚道方言を基層としたものではあるものの、その影響は相対的に少なくなっているといえそうである。

**4.2. 中国朝鮮語** 中国朝鮮語の影響を受けた特徴について語彙という観点からみてみよう(なお、ここでは、「中国朝鮮語」を千惠蘭(2005:75)に従って、「中国において学校教育などで教えられている標準朝鮮語」と定義する):

- [例4] (1) HN2: 一直 wuli motwu **lakkwancekin** salmuy thaytolo… (楽観的な)  
 (2) HN7: Kuliko i **nokumphaynun** seysangeyese ta ollaissta ? . (録音ペンは)

(1)は、頭音法則が適用されない中国朝鮮語の規範に従った例である。こうした例は、朝鮮族学校における学校教育の影響を受けたものであると考えられる。ただし、その一方で、本調査では、(2)のように[l] > [n]という交替(頭音法則の適用)をみせた例も確認された。これは基層言語(慶尚道方言)というよりは、同時代の韓国語の影響を受けた

ものであると思われる。どのような語彙において頭音法則が適用されやすいのか、あるいはその選択には話者のどのような意図が反映されているのかは、本調査からは解明することができなかったが、上掲のような例から、少なくとも同時代の分析地域の朝鮮語においては、学校教育の影響により、中国朝鮮語の規範が一定の浸透をみせつつも、異なる変種的特徴の混在が確認されることがわかるだろう。

#### 4.3. 韓国語 韓国語(韓国で使われる言語の総体)からの影響について、音韻、語彙、文法という観点からみてみよう:

[例5] (1) HN3: Yocum ponun tulama malhaypapa. Ku **yaykihaytwu** me… (話しても)

(2) HN16: Ike malhamu an tayl ke **kathay**. (～みたい)

(3) HN12: A ce pakkeyse **tutkwu issnun** ke anikeyssci?. (聞いている～)

(4) HN16: Khephi, khephi, khephi, **tutie**… Na ttak nemwu mekkosiphe kuke… (ついに)

(5) HN3: A, ku tongmwul **heyemchinun** ke… (泳ぐ～)

(6) HN7: Ce icey kuman **halkeyyo, hallayyo**. (しますね、しますよ)

(1)は[o] > [u]というソウル方言に代表的な母音交替を示した例、(2)は **kathta** (～ようだ)の略待において[kat<sup>h</sup>a] > [kat<sup>h</sup>e] という交替をみせた例で、いずれも現代韓国語の話しことばにおいてよく確認される語形と一致するものである。また、(3)では-ko isstaにおいて[ko] > [ku]という母音交替がみられるが、このような交替は、現代韓国語の話しことばでは、一般的には多くみられないものである。本来、保有していない音韻的特徴を過剰般化(overgeneralization)して適用した例であると思われる。また、(4)の **tutie** (ついに)、(5)の **heyemchinun** ~ (泳ぐ～)は、中国朝鮮語では、それぞれ **tutiye**、**heyemchinun** ~となるものである。いずれも韓国語の影響を受け、[jɔ] > [ɔ]という短母音化を経た例である。さらに、語彙については **taypak!** (すごい)や **hel!** (ええ、うわあ)といった韓国における流行語、さらには **chikhin** (チキン)、**haympeke** (ハンバーガー)、**kholla** (コーラ)、**phica** (ピザ)といった外来語の使用も確認されたが、こうした語彙は、中国朝鮮語文の規範、学校教育における指針を反映した辞典である延辺社会科学院语言研究所(2009)には、いずれも登録がされておらず、韓国語からの影響であることが予想される。最後に(6)は、意志、意向を表す表現-(u)lkeyyo, -(u)llayyo がみられるが、これらもやはり韓国語の影響を受けたものであるとみられる。以上のように黒龍江省 移住第4世の朝鮮語は、韓国語の影響を一定数受けていることが明らかになった。ところで、その一方で、「**tutkwu issnun** ~」や「**yuthwupu**」(<yuthyupu, youtube)のように、必ずしも韓国語と一致した使用がみられるわけではないことも確認された。このような韓国語の浸透は、黒龍江省朝鮮語に限らず、東北3省各地で普遍的にみられる現象である。これらは、1992年の中韓国交修交以降、4半世紀に渡って受けてきたものであると考えられ、テレビ番組や音楽、映画といった媒体や人的交流など多様なチャンネルを通して、今後もますます流入が続くものと思われる。

#### 4.4. 朝鮮語の他方言 4.1.~4.3.以外の変種からの影響について音韻、語彙、文法という観点からみてみよう:

[例6] (1) HN8: Ta kakca **halil** hacimu. (する(べき)こと)

(2) HN3: Neney pan **an paywecwucyanna**. (教えてくれないじゃない)

(3) HN8: Kuntey yayneytwuli 15pwun tongan mal **hannato** an halkkel. (1つも)

(4) HN3: Cenyek casup sey penccay sikan pocyana. ikehala hacyana. **nanu** anhay. (私は)

(5) HN11: Nolay hanna **pwullecwukeyssumtayo**. (歌ってあげますよ)

(6) HN3: Nay manyakey taymu nato **ocimu**. (来るよ)

(7) HN3: Me **hayko sipheto** yelsimhi hayto meli sokulo an tuleka. (したくても)

先に[例1]で、ilyoil(日曜日)における[ilnjoil] > [illjoil]という n 挿入(後の流音化)の例をみたが、ここでは、**halil**(する(べき)こと)において[haln̄il] > [hallil]という変化が起こっていないことがわかる。**halil** は、ソウル方言に

おいても[hallil]と発音されることを鑑みた時、これは他変種の影響を受けたとみるのが妥当である。Sin Ciyeng, Cha Cayun(2003)によれば、北朝鮮の朝鮮語(同書での術語は北韓語)においては、n 挿入が起こりにくいという特徴があるため、咸鏡道方言や平安道方言、あるいは、学校教育による平壤文化語の影響を受けたものである可能性が考えられる。また、(2)の paywecwucyanna にみられる paywecwuta は、「教える」という意味で、本来は北朝鮮の文化語の語彙である。このような語彙は、初期の移住世代が受けた学校教育を通じて中国朝鮮語内に流入し、それが普及、定着したものである可能性が高い。また、(3)の hanna は、hana(1つ)の方言形であるが、文化語、あるいは咸鏡道方言から入った可能性が高い。(4)~(6)は咸鏡道方言を基層とする変種の影響を受けたもので、(4)-nu/unu(-nun/un)、(5)は-sumta (-supnita)、(6)は-cimu (-ci, ci mwe)が現れた例である。こうした語形は、地域を接する黒龍江省 牡丹江地区、あるいは吉林省 延辺朝鮮族自治州の話者との接触、あるいは人的流動による影響を受けたものと思われる。また、(7)は平安道方言を基層とする変種の影響を受けたものと思われ、hako > hayko のように、hata 用言において ha->hay-という交替をみせている。こうした交替は、高木丈也(2016)で分析した遼寧省朝鮮語話者の談話で確認された特徴と一致するものである。河須崎英之(2013:7)によると、黒龍江省 哈爾濱市には、様々な地域の話者が集まっており、『私は慶尚道の言葉を話している』『あの人は平安道の話し方をする』など、それぞれの言葉の違いを意識している人が多い」という。各方言変種が具体的にどのような経路から流入してきたかを解明することは難しいと思われるが、少なくとも共時態としての中国朝鮮語は、移住後1世紀の時を経て、他地域出身者の流入や、人的接触が拡大し、より多様な変種の影響を受けているようである。

**4.5. 漢語** 漢語の影響を受けた朝鮮語の使用状況について、主に音韻、語彙という観点からみてみよう:

[例7] (1)HN7:Kulikwu **iketwu** isscanha. (これも)

(2)HN16:**Kulengkka** 体育生 i swunsetaylo kassumyen cohkeysse. (だから)

(3)HN7:Na **phyengsiey** cwungkwukmalhako….(普段) [ < 平时(píngshí) ]

(4)HN7:Na kocwung **philep** hwu na ilpon kanta. (卒業) [ < 毕业(bìyè) ]

(5)HN16:**Phankongsiey** sensayngtul ta issessumyen cohkeysse. (事務室に) [ < 办公室(bàngōngshì) ]

(6)HN16:Kulengkka **thiwisyeyngi** swunsetaylo kassumyen cohkeysse.

↑(体育会系の学生が) [ < 体育生(tìyùshēng) ] ↓(サッカーして) [ < 踢足球(サッカーを蹴る) ]

(7)HN11:Cikum chocwung 3haknyen cikum **chwukkwu chako**….

(1)は ikesto(これも)が[igɔ̃du]として現れている。韓国語でも ikes > ike のような指示代名詞の話しことば形が多用されるが、-to(-twu)のような助詞が結合する場合には、ikesto という形になるのが普通である。こうした例は、発表者が延辺朝鮮語の分析をした際にもたびたび確認されたもので、漢語においては音節末において[p]、[t]、[k]という内破音を持たないため、それを回避しようとした結果、生成された形のものである。また、(2)は kulenikka(だから)が [kʉrɔ̃nʔka] (母音脱落) > [kʉrɔ̃ŋʔka] (逆行同化)という過程を経たものであると思われ、[n] + [ʔk]という子音連続を回避しようとしたものである。これらは(広義の)漢語による干渉(interference)を受けた例であるといえるだろう。また、中国朝鮮語における漢語からの語彙レベルの影響としては、1)漢語の単語を朝鮮語の漢字音読法により音訳したもの、2)漢語の単語を音借したもの、3)漢語の単語を意識したもの、4)漢語の単語を半音訳・半意識したものがあることが知られているが(Kim Kicong(1990))、本調査でも、音訳((3)、(4))、音借((5)、(6))、意識((7))が確認された。また、高木丈也(2016)でも言及したことがあるように中国朝鮮語では、漢語要素に~hata が結合し、用言に転成される現象が広範囲にみられる。本調査でも sangkwa(上课)hata, pokkwa(补课)hata のように音訳語彙を用言化したもの、演讲(yǎnjiǎng)hata、插队(chā//duì)hata のように音借語彙を用言化したものが確認された。このうち上课(shàng//kè)、插队(chā//duì)などは、目的語を伴った離合詞(动宾结构)であるが、VO構造全体があた

かも名詞であるかのように受容されており、～hata の機能語としての使用範囲の広さが伺える。また、この他に、myechsi < myechsiey (何時に)、ke < kel (～ことを) のように助詞が脱落した発話も多く確認された。これらも助詞を持たない漢語の影響を受けたものである可能性が高い。

**4.6. 誤用** 朝鮮語として誤用と判断されるものをみてみよう(紙面の関係上、以下には用例のみを列挙する)：

- [例8] (1) HN16: **Elma** cohnya?. [elmana] (どんなにいいと思う?) ※[ ]は誤用に対する標準的な語形を表す。  
 (2) HN11: Cey wunmyengi cel **ikkusununteykkaciipnita**. [ikkununteykkaciipnita]  
 (私の運命が私を導く(ところ)までです)  
 (3) HN3: Hal cwul **moluntey** ettukhay. [molununtey] (やり方がわからないんだけど、どうしよう)  
 (4) HN3: Nanun hal cwul **mollakwu**… [moluko] (私はやり方がわからないし…)  
 (5) HN3: **Tathwunun kathay**. [tathwunun kes kathay] (喧嘩しているみたい)

**4.7. コードスイッチング** 朝⇒漢、漢⇒朝のコードスイッチングを主に生起要因という観点からみてみよう：

- [例9] (1) HN15: Casupsikan 支配. **Wancenhi 全是 casupsikan**… (完全に全が自習時間…) 【強調】  
 (2) HN7: 那个 那个 kuke kuke kuke 那个 **Kkochpota namca** 男主人是什么来着? .  
 (あの花より男子、男性の主人公って誰だったっけ?) 【適当な言語への切り替え①】  
 (3) HN15: **你要吃 Tteppokki** 吗. (あんた食べる? トッポッキ) 【適当な言語への切り替え②】  
 (4) HN11: **不是 15pwun** 吗?. (違うの、15分?) 【言いやすさ】

**5. 結論** 本発表では、黒龍江省朝鮮語の談話の特徴を分析した。本研究で明らかになったことは、以下の通りである。まず、話しことばとしての黒龍江省朝鮮語は、慶尚道方言、(規範としての)中国朝鮮語、韓国語、朝鮮語の他方言、漢語といった言語変種の影響を受けて発展してきたものであることが明らかになった。このうち慶尚道方言は主に移住第1世代の出身地、中国朝鮮語は中国における言語政策、および学校教育、韓国語は近年の韓国との人的、文化的交流の深化、朝鮮語の他方言は定着以降の繰り返される人口移動、漢語は地域の優勢言語の影響をそれぞれ受けたものであり、それぞれ異なる時代背景、要因の影響を受けたものである。また、朝鮮語そのものの分析においては、中国朝鮮語の規範にも現代韓国語の規範にも一致しない誤用が散見され、移住第4世代の朝鮮語能力は相対的に低下しつつあることが解明されたほか、彼らの言語使用においてはコードスイッチングが日常的に行なわれており、補完的に複数の言語変種を用いることにより、相互作用における多様な目的を遂行しようとしていることが確認された。このように本研究で分析した朝鮮族第4世の朝鮮語では、ある種、ピジン(pidgin)、クレオール(creole)的な性格を帯びながらも複数言語、変種を極めて流動的に取り入れ、相互作用が展開されており、こうした言語、変種の要素は、(意識的であれ、無意識的であれ)多様なドメイン(domain)に分化するに留まらず、クラス内の友人間談話という単一のドメイン内における言語使用においても確認され、相互作用の遂行に寄与していることが明らかになった。

**参考文献**

- 河須崎英之(2013)「黒龍江省鉄力出身朝鮮語話者のアクセント」『朝鮮語研究』5  
 千惠蘭(2005)「中国延辺朝鮮語の聞き手待遇について—「하오 hao 体」を中心に—」『社会言語科学』8・1  
 高木丈也(2016)「遼寧省地域朝鮮語における友人談話の発話形式—基層方言との関係という観点から—」『朝鮮学報』241  
 Kim Kicong(1990)「中国における朝鮮語語彙規範化作業」『語学研究』26・1  
 Pak Lyenok(2013)「黒龍江省東南部地域 朝鮮語使用実態考察」『黑龙江朝鮮語研究』  
 徐炳國(1983)「慶尚道方言の単母音音素について」『国語教育研究』15  
 Sin Ciyeng, Cha Cayun(2003)『国語の音の体系:国語音韻論研究の基礎のために』韓国文化社  
 延辺社会科学院言語研究所(2009)『朝鮮語小詞典』(2009年3次改訂版)黒龍江朝鮮民族出版社  
 I Cangsong(2004)「中国朝鮮族の言語使用様相に関する研究—黒龍江省哈爾浜市の朝鮮族共同体を中心に」『人文言語』6  
 全学錫(1996)『朝鮮語方言学』延辺大学出版社  
 He Tekhayng, Pak Thayswu(1990)「黒龍江省朝鮮族の二重言語使用実態」『中国朝鮮語文』1990-1  
 国务院人口普查办公室, 国家统计局人口和社会科技统计司(2012)『中国2010年人口普查资料』中国统计出版社